

室内オーケストラシリーズ19 PROGRAM

ハイドン:交響曲 第94番 長調「驚愕」 Hob.I:94 (約23分)

Franz Joseph Haydn: Symphony No. 94 in G major, Hob.I:94, "The Surprise"

- 第1楽章 アダージョー ヴィヴァーチェ・アツサイ Adagio - Vivace assai
- 第2楽章 アンダンテ Andante
- 第3楽章 メヌエット:アレグロ・モルト Menuet: Allegro molto
- 第4楽章 フィナーレ:アレグロ・ディ・モルト Finale: Allegro di molto

プレイエル:クラリネット協奏曲 第1番 長調 (約24分)★

Ignaz Joseph Pleyel: Clarinet Concerto No.1 in C major, Ben.106

- 第1楽章 アレグロ Allegro
- 第2楽章 アダージョ Adagio
- 第3楽章 ロンド:アレグロ・モルト Rondo: Allegro molto

— 休憩 (20分) — Intermission

ベートーヴェン:交響曲 第2番 長調 op.36 (約32分)

Ludwig van Beethoven: Symphony No.2 in D major, op.36

- 第1楽章 アダージョー アレグロ・コン・ブリオ Adagio - Allegro con brio
- 第2楽章 ラルゲット Larghetto
- 第3楽章 スケルツォ:アレグロ Scherzo: Allegro
- 第4楽章 アレグロ・モルト Allegro molto

指揮・クラリネット:ポール・メイ工 Paul Meyer, Conductor & Clarinet (★演奏曲)

管 弦 楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2014 11/28(金)・29(土) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

室内オーケストラシリーズ19/これさえ見ればわかる! 今回の聴きどころ

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

奥田 佳道(音楽評論家)

最高峰のクラリネット奏者、指揮でも魅せる

鮮やかなテクニックと音楽性で聴き手を魅了するフランス出身のクラリネットの名匠ポール・メイ工(1965~)は、指揮活動も盛ん。そんなマエストロ、メイ工が選んだのはウィーン古典派交響曲の傑作。ハイドン晩年の「驚愕」にはまさに聴き手を驚かせる仕掛けが。ベートーヴェン若き日の交響曲第2番もウイットと次代を切り拓く覇気に満ちた逸品で、有名曲に負けない劇的なサウンドがホールを満たす。ハイドンの愛弟子プレイエルの協奏曲はメイ工にとっておきのレパートリー。クラリネットのすべてを味わえる。

ライター
おすすめ「必聴ポイント」

プレイエル:クラリネット協奏曲 第1番 長調

モーツァルトと同世代のプレイエル。メイ工の「吹き振り」は必見でもある。機智に富んだハイドンと新機軸も魅力のベートーヴェンの交響曲では木管楽器の妙技にもご注目を。

PROFILE



© Vandoren Edith Held

ポール・メイ工 (指揮者・クラリネット) Paul Meyer, Conductor & Clarinet

名実共に世界のトップに立つクラリネット奏者として活躍する傍ら、指揮者としてのキャリアも着実に築いている。ヨーロッパ及びアジアの各オーケストラに客演を重ね、07~09年、首席指揮者ジョン・ミュンフンの薦めによりソウル・フィルハーモニー交響楽団の准首席指揮者を務めた後、10年~12年12月東京佼成ウインドオーケストラの首席指揮者を務める。

65年アルザス生まれ。13歳でソリストとしてデビュー。パリ高等音楽院とバーゼル音楽院で学ぶ。フランス国内外のコンクールで優勝後、84年NYデビュー。以来世界有数のソロ・クラリネット奏者として活躍。

完璧な技術とずば抜けた音楽性、品の有る豊かな音色を併せ持つ天才クラリネット奏者としてベリオ、ペンデレツキを始めとする数多くの作曲家達から曲を捧げられ初演も多い。

室内楽でも活発な活動を行っており、パユやオーボエのフランソワ・ルルー等、現代最高のフランスの木管奏者達とスーパー・アンサンブル、「レ・ヴァン・フランセ」を結成。12年に発売された2枚組のCD「フランスの風・ザ・ベスト・クインテット」は12年度第50回レコード・アカデミー賞大賞銀賞を受賞している。

デンオン、BMGファンハウス、EMI他多数のレーベルでCDが発売されている。

使用楽器はBUFFET CRAMPON Divine。

PROGRAM NOTE

曲目解説——演奏をより深く楽しむために 奥田 佳道 (音楽評論家)

ハイドン:交響曲 第94番 ト長調「驚愕」 Hob.I:94

初演:1792年3月23日 ロンドン

平穏な第2楽章アンダンテに突然のフォルテ!

長らくハンガリー系の貴族ニコラウス・エステルハージ侯に仕えながら多彩な創作活動を行っていたハイドン。1780年代に名声は広がり、パリの演奏団体やスペインの聖堂のためにも曲を提供するほどだった。しかし生活の基本はあくまで、現在のオーストリアとハンガリーのローカル都市だった。

そんなハイドンに転機が訪れる。1790年の秋に雇い主のニコラウス・エステルハージ侯が亡くなり、ハイドンが楽長として勤務していたエステルハージ家のオーケストラは解散。彼は自由な立場の音楽家としてウィーンへ赴く。

それを知ったドイツ出身のヴァイオリニストで、興行主としても知られていたヨハン・ペーター・ザロモンは、ハイドンにロンドンへ渡り、かの地の素晴らしいオーケストラ(ザロモンが主宰するシリーズ)のために交響曲を作曲してもらえないかと頼み込む。

かくしてハイドンは1791年から92年にかけて、そして1794年から95年にかけて、ロンドンに長期滞在し、ザロモンのオーケストラのために都合12曲の新しい交響曲を書くのである。

第2楽章の強烈な響きにより「驚愕」The Surpriseと呼ばれるようになった交響曲第94番 ト長調は、最初の渡英時に書かれた逸品のひとつ。ドイツ語の愛称はMit dem Paukenschlag、ずばりティンパニの打奏を伴った、である。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732~1809) Profile

交響曲、弦楽四重奏曲を始めとする多彩なジャンルに傑作を残したウィーン古典派の「パパ」で、100曲を超える交響曲はモーツァルト、ベートーヴェンにも多くの影響を与えた。ハンガリー系の貴族エステルハージ家に長らく仕えていたが、晩年はロンドンに2度招かれ、賞賛を博すと共にヘンデルのオラトリオを知り、後にウィーンで「天地創造」「四季」を書く。洗練された筆致と機智に富んだ作風が魅力。4楽章から成るソナタ様式の完成者でもある。

プレイエル:クラリネット協奏曲 第1番 八長調 Ben.106

初演:不明 出版:1797/99年

モーツァルト時代の傑作 メイエの勝負曲!

秘曲が舞う。しかしこのコンチェルト、クラリネット奏者にとって大切な作品である。今日イグナツ・ヨーゼフ・プレイエル(イニャース・ジョセフ・プレイエル)の名は、もっぱら19世紀初頭のパリで成功した楽譜商、楽譜出版社、楽器製作会社を興した偉人として伝えられる。

しかしイグナツ(イニャース)は、ハイドンの愛弟子にして、ひとつ年上のモーツァルトも賛辞を惜しまない作曲家だったのである。ストラスブールの聖堂で楽長を務めた後、1791年、92年にはロンドンで指揮活動も行った。1791年ロンドン?そうプレイエルは恩師ハイドン、その知人ザロモンが活躍したオーケストラ及びその周辺にいたのである。

しかし歴史は非情なものである。パリに移ったプレイエルは、もっぱら楽譜出版業、ピアノ製作会社の社長として知られるようになる。ちなみにシヨバンは、1829年に建てられたプレイエルのホールでパリにデビューし、プレイエル製のピアノを(エラル社との楽器とともに)好んだ。

八長調として出版された第1番は、ヴァイオリン、フルート、チェロでの演奏も可能。プレイエルのクラリネット協奏曲に魅了された名奏者としてハンブルク生れのヨースト・ミヒャエルス(1922~2004)の名を挙げておこう。

曲は、速い~ゆっくり~ロンド(速い)の古典的3楽章からなる。均整の取れた調べに寄り添う技巧的なパッセージも魅力となる。

楽器編成

独奏クラリネット、オーボエ2、ホルン2、弦楽5部

イグナツ(イニャース)・プレイエル (1757~1831) Profile

モーツァルトが1784年の父への手紙で「ハイドンの弟子プレイエルの弦楽四重奏曲を知っていますか。もし知らないのなら、今すぐ楽譜を手に入れるべきです。素晴らしい作品です」とまで記したオーストリアの作曲家だったが、19世紀初めにパリに移住し、音楽ビジネスで成功。今日では、息子のカミーユとともにピアノ製作のプレイエルとして知られる。ちなみに楽譜商としては、小型の(ポケット)スコアを初めて制作・出版したことで知られる。

ベートーヴェン:交響曲 第2番 二長調 op. 36

曲年:1803年4月5日 アン・デア・ウィーン劇場

ベートーヴェン若き日の肖像 優美な調べも覇気も舞う

アン・デア・ウィーン劇場でのベートーヴェンと言えば、かの「運命」と「田園」、それにピアノ協奏曲第4番が公開初演された1808年暮れの長時間プログラムが有名だが、この交響曲第2番二長調作品36がお披露目された1803年春の公演も負けていない。ピアノ協奏曲第3番ハ短調作品37の初演のほか、3年前に書かれた交響曲第1番ハ長調作品21の再演も行なわれたのだから。前途洋々のベートーヴェン、このとき32歳。

劇的な筆致も歌謡性も美質となる交響曲第2番は1802年の夏、ウィーン郊外のハイリゲンシュタットの森で集中的に書かれたようである。ハ長調を基調とする交響曲第1番と同じ楽器編成を持ち、ハイドンらによって培われたウィーン古典派交響曲のスタイルを遵守しているが、いっぽう、次代を切り拓く鬼才ベートーヴェンの姿も浮かび上がってくる。

拡大された第1楽章の序奏からして、ベートーヴェンは自らの信条を貫く。トランペットとティンパニを休ませ、妙なる楽想を紡いだハ長調の第2楽章ラルゲットの、何と美しいこと。「英雄」での活躍を予告するようなホルンの妙技も聴こえてくる。

第3楽章はベートーヴェンをベートーヴェンたらしめる動的なスケルツォ。交響曲ではこの第2番で初めて使った言葉だ。意表を突く第4楽章の創りまで、聴きどころは尽きない。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) Profile

ボン生れ。音楽の都ウィーンでハイドン、アントニオ・サリエリ(1750~1825)に学ぶとともに、20歳台半ばのときにピアノのヴィルトゥオーゾとして脚光を浴びる。1800年、29歳のときに交響曲第1番を発表。ウィーン古典派の型を遵守しつつ、次代を切り拓く雄渾な傑作を数多く書き始める。難聴に負けることなく、9曲の交響曲、5曲のピアノ協奏曲、多数のピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲などを作曲。後のブラームスにも影響を与えた。